

MICHAEL FARR

TINTIN

タンタンの冒険 その夢と現実

訳:小野耕世



謝辞 ACKNOWLEDGEMENTS

パリで小さな子どもだった頃、タンタンの新しい「アルバム」(フランスで、コミックスの単行本をそう呼ぶ)が出るのを、熱心に待ちわびていたことを思いだす。それはいつでも嬉しい宝もののような贈りもので、喜びと無限の楽しみが、いっぱい詰まっていた。私にとって読書の最初の段階というのは、就寝前に食堂のテーブルで、母とタンタンといっしょにすごす時間なのだった。

私の一家がロンドンへ戻ったのが、たまたまタンタンの英語版が初めて刊行されたときだったのは、幸せな偶然であった。私は姉が寄宿制学校へ行くのを見送りに、リヴァプール・ストリート駅に行ったのだが、そこで、元気に楽しむようにと、出たばかりの「金のはさみのカニ」の本をもらったのだった。後に私立小学校にはいると、そこにはなかなかすてきな規則があって、タンタンの本は、それがフランス語のマンガである限り、読むことが許されていたのだった。

私が持っているタンタンの本一式には、いろいろ連想させるもの、思い出すことがたくさんある。どんな病気のときでも、処方された薬とタンタンの冒険の本さえあれば、平気だった。外国語も、好きな本の翻訳を読みば、楽しく学べるものだ。タンタンについて語ったり、タンタンをほめたりすれば、ロマンスのきっかけにさえなり得る。ジャーナリスト、とりわけ海外通信員にとっては、タンタンは常につきないインスピレーションのみのもとである。

1977年、私はロイターの通信員としてフリュッセルにやってきた。私はタンタンとエルジェの生まれ育った街に住み、すばらしく謙虚な作者エルジェ自身に会った。ほどなく彼は、タンタン誕生50周年を祝うさまざまなイベントのため、疲れきってしまった。当然のことながら、私はまっさきに、エルジェ本人と、彼が創りだし多くの人たちを楽しませてきた登場人物たちに感謝を捧げたい。また、私と同じ熱意を持つてはげましてくれた両親にも感謝する。

もっと新しくは、見識と忍耐をもってタンタンをイギリスにひろめるのに最も貢献したジェイン・テイラーの協力に感謝したい。

この本のためには、企画を立ちあがらせてくれたジョン・マレーとキャロライン・ノックスに、エルジェ財団のベルナール・トルドウール、フィリップ・ゴダンの寛大な助力ともてなしに、ケリー・ウイングフィールド・デイギーの技術的な助けに、これまでの私の本の貴重な情報源であるステファニー・ジョンソンにはポール・レミについての資料に対し、そしてなによりもこの企画を可能にしてくれたニックとファニーのロドウェル夫妻に感謝する。

マイクル・ファー

This book has been produced with the assistance of:

Didier Platteau, Editorial Direction

Agnès Roisse, Project Coordination

Bernard Tordeur, Illustration Research

Paul Henry Carlier, Adaptation and Proof-reading

Michel Bareau, Art Direction

Ivan Noerdinger, International Co-production

Louise Cliche, Art Concept and Design

Introduction	序	8
Tintin au pays des Soviets	「タンタンのソビエト旅行」	10
Tintin au Congo	「タンタンのコンゴ探険」	20
Tintin en Amérique	「タンタン アメリカへ」	28
Les Cigares du Pharaon	「ファラオの葉巻」	40
Le Lotus bleu	「青い蓮」	50
L'Oreille cassée	「かけた耳」	60
L'Île Noire	「黒い島のひみつ」	70
Le Sceptre d'Ottokar	「オトカル王の杖」	80
Le Crabe aux pinces d'or	「金のはさみのカニ」	90
L'Étoile mystérieuse	「ふしきな流れ星」	98
Le Secret de la Licorne et Le Trésor de Rackham le Rouge	「なぞのユニコーン号」と「レッド・ラッカムの宝」	104
Les 7 Boules de cristal et Le Temple du Soleil	「ななつの水晶球」と「太陽の神殿」	114
Tintin au pays de l'or noir	「燃える水の国」	126
Objectif Lune et On a marché sur la Lune	「めざすは月」と「月世界探険」	134
L'Affaire Tournesol	「ピーカー教授事件」	144
Coke en stock	「紅海のサメ」	150
Tintin au Tibet	「タンタン チベットをゆく」	160
Les Bijoux de la Castafiore	「カスタフィオーレ夫人の宝石」	170
Vol 714 pour Sydney	「シドニー行き714便」	178
Tintin et les Picaros	「タンタンとピカラたち」	188
Tintin et l'Alph-Art	「タンタンとアルファ・アート」	198
Translator's After word	訳者あとがき	204

MICHAEL FARR

TINTIN

タンタンの冒険 その夢と現実

訳:小野耕世

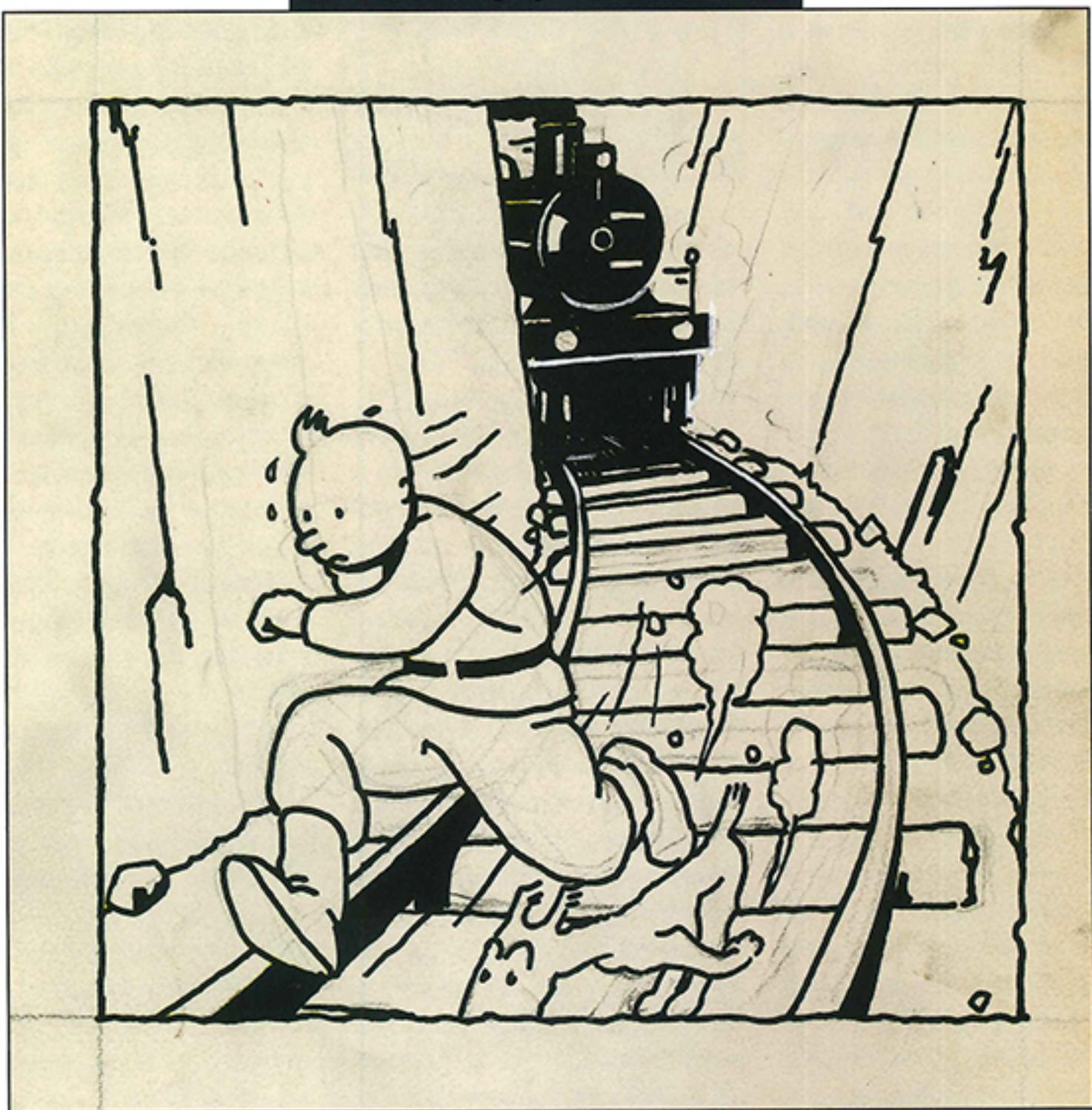


MOULINSART

さあ最初の冒険だ。タンタンは愛犬スノーウィとともに
ソヴィエト・ロシアに出発する。
ボルシェヴィキと戦い、新聞にリポートするためだ。

「タンタンのソビエト旅行」

Tintin au pays des Soviets



聞のカメラマンたちといっしょに、い
ま私たちはブリュッセル駅にいる。
愛犬のスノーウィとともに、タンタンが24も
の冒険旅行で世界中に知られる少年記者と
なるその最初の出発に立ちあつてているのだ。

1929年1月のこと、最後の未完の冒険「タンタンとアルファ・アート」から54年も前のこと。当時の映画のように、マンガは白黒で描かれ、後におなじみのタンタンよりふとつており背は低い。だがその若さは変わらないし、その特徴のある靴と、たまにオーバーコートに隠されることもある大柄のチェックのスーツは間違いなくすでに時代遅れだった。イギリスのユーモア作家P.G.ウッドハウスの登場人物ジーヴスが、もし主人がそんな服を着ていたら、きっと眉をしかめたにちがいない。

記事はどうしたのか？

タンタンを送り出した編集者は「気をつけてな！連絡を忘れるなよ」と言ったが、タンタンは、新聞記者らしい自信もなさげに答える「絵ハガキとウォトカとキャビアを送りますよ」。行き先はソヴィエト・ロシアだ。彼が働いている新聞「フチ20世紀」は「常に読者に海外の最新事情を伝えることを目的にトップクラスの記者たちを送りだす」のであり、今回タンタンが起用されたのだ。かくして彼はロシアへと向かった……。

「さて、宿屋に戻って新聞社に記事を送らなくちゃ」とタンタンは愛犬に言う。部屋のイスにすわりテーブルにかがみこみ、ものすごい長さの原稿にとりかかる。原稿の山を封筒になんとか押しこんでから、はっと気がつく「どうやってこの原稿を新聞社に届けるのか？」彼はあくびをする「まあいいや、あした考えることにして寝よう」。そしてこの冒険が終わり、彼がブリュッセルに凱旋したときにも、いったい彼がどうやって原稿を送ったのか、いや、ちゃんと彼の記事が届いたのかどうか、私たちにはわからないのである。電話をしたり電報も送った気配はないのに、彼のスクープはどう伝えられたのか。

1981年12月、ジャーナリストである私は、戒厳令下のポーランドから仲間が旅行者に託したタンタンの原稿なみの長い記事を、ベルリンの鉄道駅で受けとった。それを電



タンタンとスノーウィはブリュッセル駅から出発する(第1ページ)。

話でロンドンの「デイリーエクスプレス新聞」に伝えるのが私の役目だった。その2年前には、私は戦火のローデシア(後のジンバブエ)において、水を運んできた軍のヘリコプターのパイロットに原稿をあずけ、リレー式にロンドンに届けてもらったことがある。きっとタンタンも同じような手段で彼のロシアでの冒険を新聞の読者に伝えたのだろう。

エルジェ自身も、いわばなりそこないの新聞記者だった。ボイスカウト活動以外には退屈だった少年期のためか、彼は熱心に事件を追いかけていた。少年時代に第一次世

界大戦が起こり、ドイツ軍のブリュッセル占領を目撃した。学校の練習帳のはじっこにドイツ兵の侵略をマンガに描いた。青年期には一方的なヴェルサイユ条約から不満が吹きだしていく様子を見ていた。20世紀の動乱の時代に彼はその最前線に生きていたのである。

まず新聞社の購読部担当に、次にイラストレーター、そして付録の週刊子ども新聞の編集者としてエルジェはカトリック系の保守的な新聞「20世紀」に勤めた。新世紀を反映した新聞名だった。彼は新聞の海外特派



(上)1929年のエルジェ。「ブチ20世紀」の仕事をしている。
(下)「フリュップとネネッスとブセットとコショネの冒険」の一場面(1929年3月14日号)。

員たちをとても尊敬していた。文章力と分析力のある彼らはエルジェのヒーローだった。当時ベルギーの記者ではアルベール・ロンドルや後に作家として名を成すジョゼフ・ケッセルなどがいた。それにもうひとりの名としてエルジェが加わってもおかしくなかつたろう。苦心の末にタンタンを生みだした男は、ときには見識のある夢想の旅行家であり、あるいは新聞記者としても成功したかもしない。だが彼の生まれつきの才能は、もっと独特な方向に、圧倒的な力で彼を押しやつていったのだった。

責任がいっぱい

「20世紀新聞」の子ども向けの木曜版付録「ブチ20世紀」の担当となったエルジェは、すぐになにか新しいものを創らなくてはと思ったが、1928年11月1日発行の第1号にはまだタンタンは登場していない。彼はまず、新聞のスポーツ担当者のひとりが書いたストーリーをもとに「フリュップとネネッスとブセットとコショネの冒険」というあまりばっ

しない連載マンガの絵を描いた。当時の物語マンガの通例で、説明文字が絵の下に印刷された。12歳のいたずらな男の子ふたりと9歳の女の子とゴムでふくらむブタが登場するマンガで、エルジェはそれに不満で、もっといい作品をと考えた。

1926年7月から、彼は「ベルギーのボーイスカウト」のためにトトールという少年団のコガネムシ部隊長を主人公にしたマンガ「トトールの冒険」を描いていた。これがタンタンの前身に相当する。それに相棒として忠実なフォックステリア犬を加えればいい。「ぼくは決してきみから離れないよタンタン」とタンタンがソヴィエトの民にはまって苦しむときに誓う。「フリュップとネネッスとブセットとコショネの冒険」にもよく似た犬が出てくる。エルジェは学校で好きだった豊かな胸をした女の子の名をとって、犬の名をミルーとした。後に「タンタン」の英語版が出るようになると、犬の名はスノーウィ(雪のように白いから)となった。



そして1929年1月10日、この不滅の少年ヒーローと愛犬は新聞に登場した。1月4日にはその予告が載っていた。タンタン物語を彩る注意深く描かれた他のキャラクターたちの登場はずっとあとになる。エルジェが魅せられていたのはアメリカだったが、「20世紀」を心血を注いで発行していた右翼の司祭ノルベル・ワレ神父の考えは違っていた。

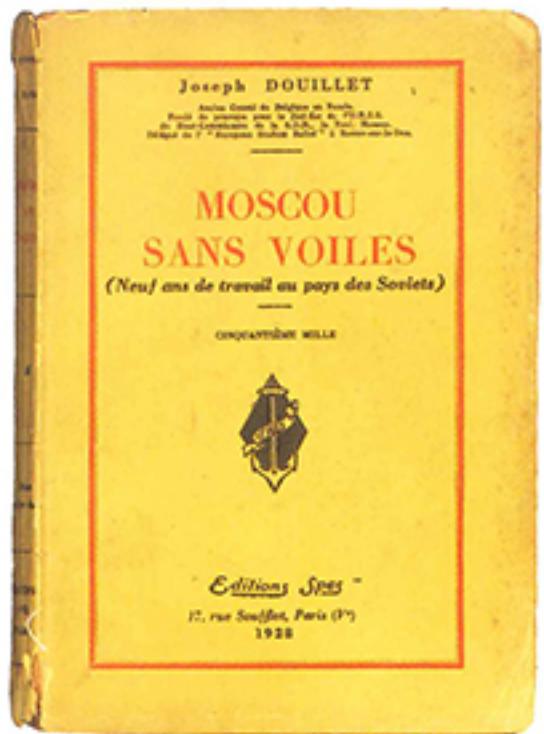
そしてタンタンの最初の活躍舞台はエルジェが思いもよらなかったソヴィエト・ロシアとなつた。ツアーリズムの時代をくつがえした十月革命から10年以上を経過したロシアは、コミュニストたちによる新憲法のもと、組織的大混乱の状態にあって、体制的な価値観を拒否していた。主義と情報の「カトリックの全国紙」をうたう「20世紀」にはうってつけの批判の対象である。ジョゼフ・ドゥイ工著「ヴェールをはがされたモスクワ」という新刊の本を手に、エルジェは最初のタンタン物語の用意をした。「20世紀」はカトリックの新聞で、当時カトリックといえば反共産主義を意味していたことを忘れてはならない」とエルジェは後に回想している。「ボルシェヴィキを滅ぼせ! という新聞の雰囲気に加えて、ソヴィエトの悪と腐敗を告発したドゥイ工の本に触発されたのです。革命ロシアで9年を過ごした著者によるこの本は1928年にパリとブリュッセルで刊行されると爆発的に売れ、西欧の多くの人たちの偏見をあおりたて、「20世紀」の読者も熱心に受け入れた。

恐るべき選挙風景

エルジェはドゥイ工の本から自由に選んで、その場面をタンタンの物語に使った。特にそつとするような選挙のシーン(「タンタンのソビエト旅行」32ページ)は、本に書かれたそのままで。オウビコーネ同志(最高委員会の引退した委員長)の演説場面で、彼は民衆に向かってこう言う「ここに3つのリストがある。ひとつは共産党の人名表だ。この表に反対の者は手をあげてくれ」同時に彼と仲間の4人が銃をとりだし農民たちにおどすように向ける。彼は続ける「反対者はいませんか? いませんね。では共産党のリストを満場一致で可決しました。あとふたつのリスト



1



2

- 1 恐ろしい投票場面(33ページ)。
- 2 この場面のもとにになったドゥイエの本。
- 3 コガネムシ部隊長
「トールの冒険」より。
- 4 「ベルギーのボーイスカウト」
1930年3月10日号。

UNITED ROVERS
PRÉSENTE
UN EXTRASUPERFILM:
LES AVENTURES
DE TOTOR
C.P. DES HANNETONS

1. Puis il s'en fut au pas scout, regardant de tous côtés et peu rassuré... Le texte du poteau indicateur, si terrible de lourdes menaces, lui fit redoubler de prudence...

2. Enfin — et son cœur sauta de joie dans sa poitrine, ce qui fit bondir la poitrine elle-même et tout ce qui s'y rattachait — au sortir d'un défilé rocheux : le ranch, le cher vieux ranch, s'offrit à ses regards.

3. Mais, chose bizarre autant qu'étrange, plus il s'approchait, plus il paraissait abandonné ! De fait, les volets étaient clos et l'habitation avait un air mystérieux et sinistre qui fit trembliller Totor.

3

10 MARS 1930

LE BOY SCOUT BELGE

REVUE MENSUELLE

4

は、投票の必要がなくなりました」。

エルジェは、同意を強要された農民群衆が、ゆっくり頭を垂れるありさまを示すことで、この場面を力強く描いた。またエルジェはボロチムキン市の工場群が、わらを燃やして稼働しているように見せかけている場面を本からとった。「すぐに工場の煙突から黒いけむりがもくもくとあがり、ソヴィエト産業の象徴である工場がフル稼働している幻影を生みだした」。これはイギリス貿易組合の代表団が見学に来たときのためだったと、ドゥイエは記しているが、エルジェは代わりにイギリス労働党代表団のような見学者を描いた。「イギリスのコミュニストのみなさんにボルシェヴィキの美しさをお見せしよう」と案内人は言う「ブルジョア国家で語られているのとは反対に、わが工場は全フル操業しております」。パイプをくわえた代表団の人びとは口ぐちに言う「美しい…とてもすてきだ」。次のページでわらを燃やしている工場のからくりが明かされる「こうしてソヴィエトは、まだコミュニストの天国を信じているばかな連中をだましているのだ」とタンタンは結論する。

これが、エルジェが描きタンタンがリポートしたときには正確でときにはそうではないソヴィエト・ロシアの暗いイメージである。「ソ

ヴィエトが美しいモスクワの街をどうしたか見ろ! ここは美しいスラムだ」とタンタンはおおげさな判断を下す(74ページ)。だが裕福な農民に会ったときの判断は、その4年後マルコム・マガーリッジが「北コーカサスへの旅」で記した印象とあまりちがわない。「市民たちは明らかに飢えており、もう3か月もパンがない」とマガーリッジは、「マンチェスター・ガーディアン」紙に、1933年3月に書いた。「彼らから奪われた食糧のなかには外国への輸出用にまわされたものがあると、農民たちはよく知っている」。さらに彼は「そこには絶望の気分がひろがっていた。20人ほどの農民が監視されながらひっぱられていくのを見た。もはや珍しい光景ではなく、関心もひかない」と記した。この描写は、その数年前にエルジェがタンタンにおこなわせた冒険のなかで示した風景を思わせる。

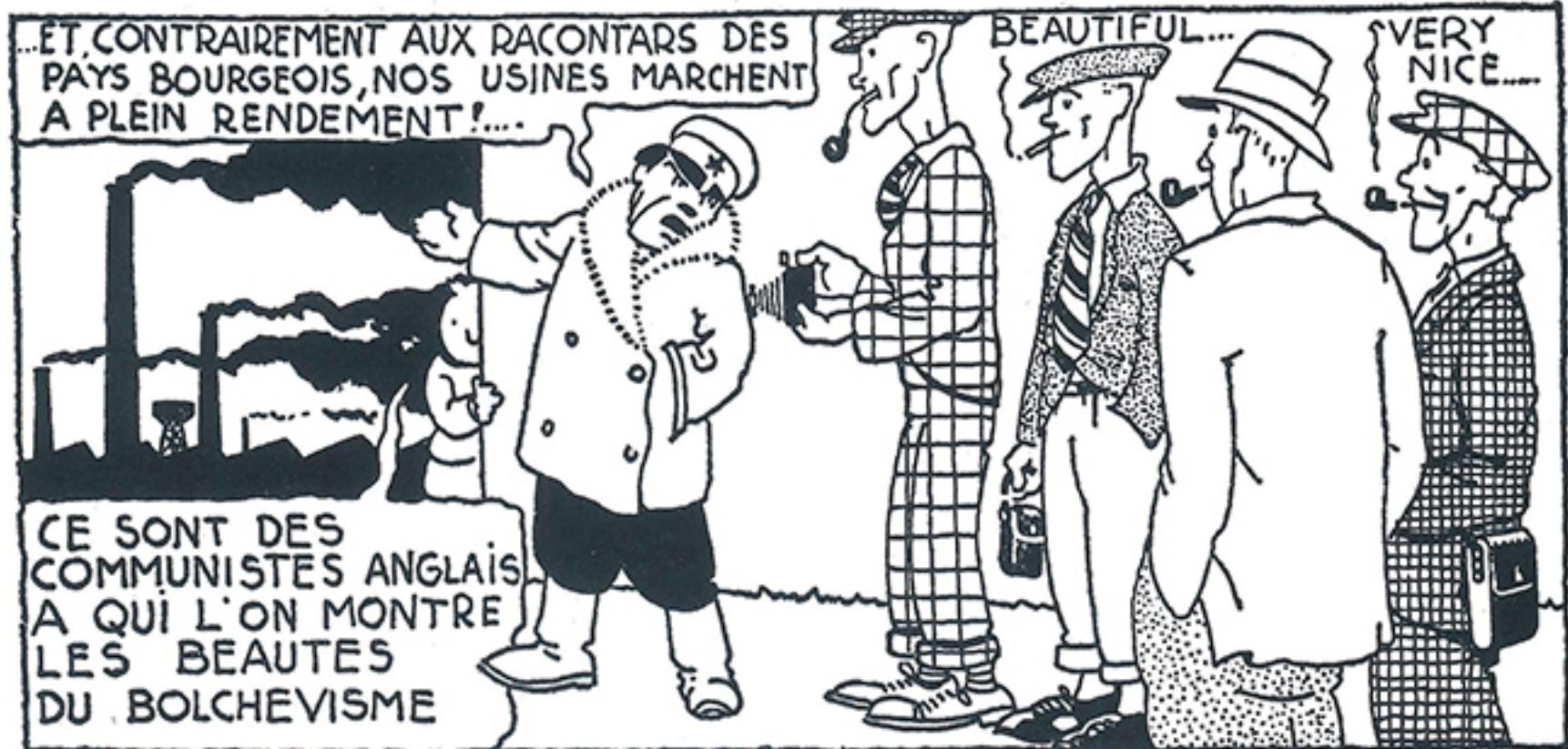
後悔するエルジェ

タンタンのソヴィエトの冒険は、私の「若さの罪」のひとつだったと、後にエルジェは常に感じていた。タンタンの本のなかで描き直されることもカラー化もされていないのはこれだけだ。ただ1973年、エルジェ資料館のコレクションのために再刊すること、海賊版がいつまでも出まわるので、1981年に復刻版の刊行とを、しぶしぶ認めたにすぎない。そのわくわくする内容と生きいきました

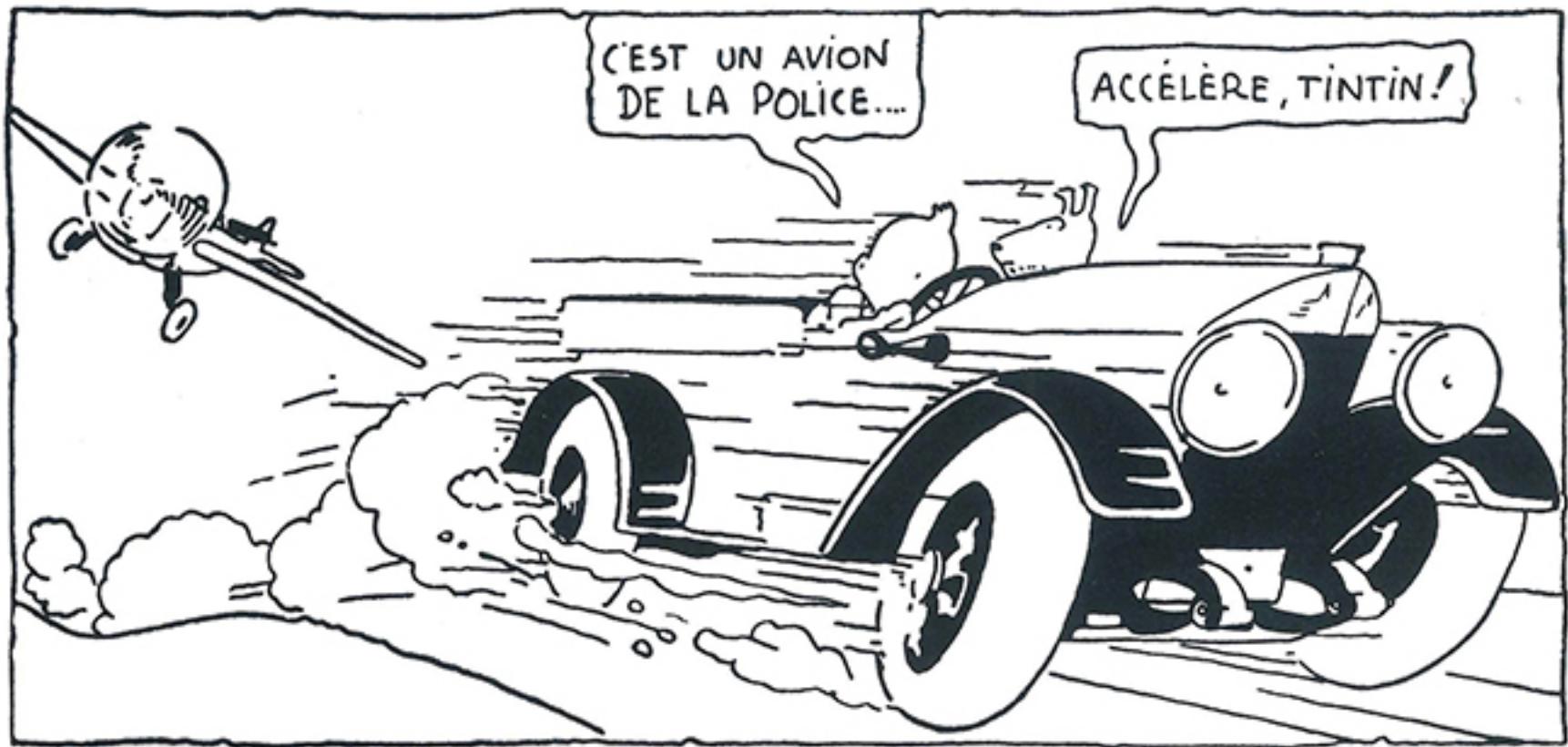
魅力にもかかわらず、後の水準から見ると明らかに欠点がある。大きな弱点のひとつは、ドゥイエの本にあまりに頼りすぎていることだ。このばかばかしく一方的な本をエルジェは唯一のよりどころとしていたのである。

後のタンタンは、描写に正確を期するためのリサーチを綿密におこなったし、その努力を惜しまなかった。彼自身は旅行をしなかったかもしれないが、タンタンを送りだす前に、その土地のすべてを確実に知るようにした。彼が多作のマンガ家でなかった理由はそこにある。驚くほど質の高い、広く訴える力のあるタンタンの物語を、50年以上のあいだに24冊ほど生みだしたにすぎない。

「タンタンのソビエト旅行」には、間違いくらいの制約があった。最大のものは時間の制約だ。記憶に残らない「フリュップとネネッスとブセットとコショネの冒険」のあと、「ブチ20世紀」ではそのあとがまのマンガがただちに必要で、タンタンの登場は遅れてはならなかった。まだ経験不足のエルジェは、自分の担当する「ブチ20世紀」のほか、本紙のほかのページにイラストを頼まれるなど、手いっぱいだった。しかもこれは新しい分野だった。物語マンガはヨーロッパでは新しい現象で、エルジェはその先駆者のひとりだった。後には自分の手法として安

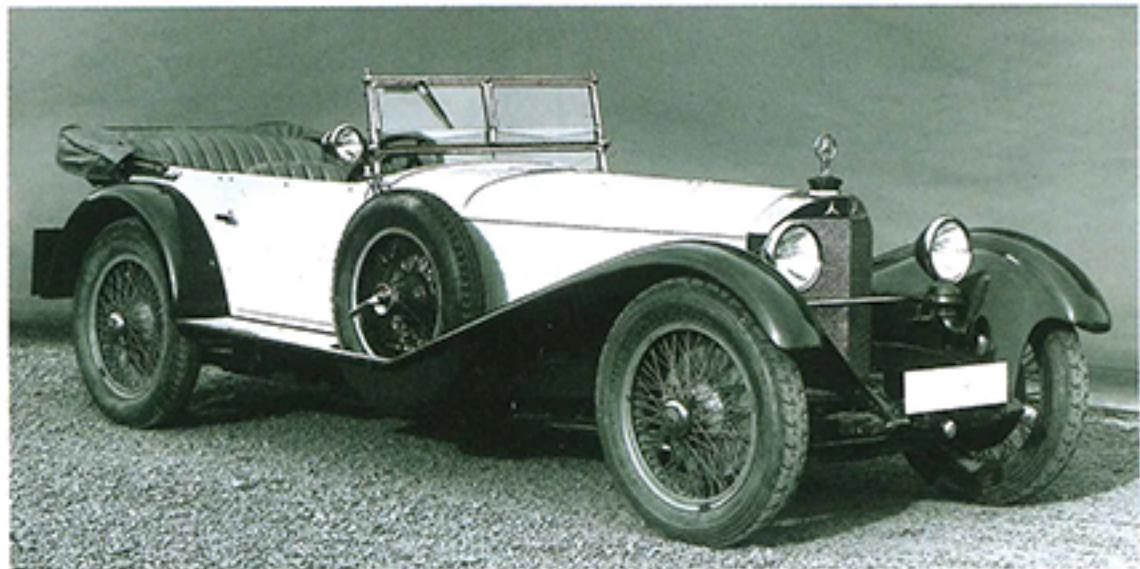


イギリスの代表団が工場を見学する(26ページ)。



定するその仕事のやりかたも、開発しなくてはならなかった。とりわけ注目すべきは、この最初のタンタン物語には、前もって練られた脚本がなかったことだろう。縦切りぎりぎりの即興のアイデアで、ひとつのシーンから次のシーンへと物語を動かしていったのだ。エルジェ自身のことばによると、「青い蓮」以前のタンタン・シリーズでは、ギャグとサスペンスの連続で、なにもきちんと構成されず、考えも練られていなかった。「私はなんのシナリオも計画もなしに旅に出たようなものだった。ほんとに先の見通しのない仕事だった。実際、これがほんとの仕事とは私は思っていなかった。ゲームや笑劇のように考えていたのさ。『ブチ20世紀』は水曜の夜に発売されるのだが、その前の週にタンタンを追いこんだ苦境から、いったいどうやって脱出させるか、水曜の朝になっても、まだ思いつかなかったときもあったほどなんだ」。

「タンタンのソビエト旅行」は、急いで描かれたことが明白だ。高い水準のエルジェの絵は、ときに荒っぽく未熟であわただしい。後の仕事で確立されたような洗練はない。にもかかわらず、タンタン最初の冒険に同行する喜びとは別に、エルジェの画家としても卓越した能力を示す、自由で自信に満ちた最高の描線による画面がいくつもある。例えばタンタンがスピードボートを操縦して行く場面(49ページ最後のコマ)は、すばらし



(上)スピード感あふれる自動車の場面(9ページ)。
(下)そのモデルとなったメルセデス・ベンツのスポーツカー(1927年型)。

く流動感がありダイナミックで、優雅ですらある。それはエルジェが優れたポスターのデザイナーであったことを思い起こさせる。力強い画面構成があり(54・55ページ)、さらに仕上げとしてスピードの感覚を表すとは見事なものだ。57ページのコマに彼がつけ加えたものがある。それは突然の加速とスピードであり、この最初のタンタン物語の忘れられない瞬間—タンタンをなによりも特徴づけるあの有名なヘアスタイルは、彼がメルセデスのオープンカーにとびのり走り出したときに起きる。彼の前髪が風圧によって立ち、うしろに流れるのである。

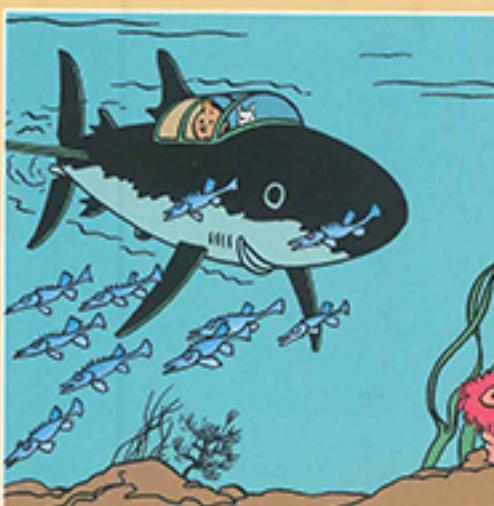
影響を受けたものは?

タンタンのロシアでの冒険は、息つくひま

を与えないノンストップの活劇だ。秘密警察に追われる場面は当時のアメリカの人気サイレント喜劇キーストン・コップの映画のようにスピードがある。純粹のスラップスティックの喜劇の瞬間と、当時の映画を強く特徴づける表現主義のイメージもある。アクションと表現スタイルの両方で、列車追跡場面などにバスター・キートンの映画「キートン將軍」と通じるものがある。1920年代の映画には、フリッツ・ラング監督によるものなど、優れた表現主義の作品があるが、(例えば120ページ)白と黒の劇的な照明効果の用法は、息をのむほど映画的だ。物語マンガの開拓者として、エルジェは20世紀の他の新しい芸術分野の発展成果を、恐れずにとりこんでいる。



FIG 12 „Rechner“ durchs Wasser. Aus der Tasche komponierte und das Klavier geschlagenen Kettchen. Sehr nach „Miss Bob“ aussieht und gleicht von einem Elektro-motor ange-



これは・・・

「タンタンの冒険」シリーズ全作品が創られた

背景と過程を追求した画期的な本!

世界じゅうのタンタンノロジストたちに捧げられた

喜びと楽しみがいっぱいの本!

※ 続きは本書でお楽しみください